

書評

伊藤由希子著

『仏と天皇と「日本国」』

——『日本靈異記』を読む』

(べりかん社・二〇一三年)

富樫 進

伊藤由希子(以下「筆者」)『仏と天皇と「日本国」——『日本靈異記』を読む』(以下、本書)は、筆者が東京大学に提出した博士學位論文を基に執筆した著作である。

本書では「日本国」における「聖」と「凡」との相互交渉という視点から『日本靈異記』(以下『靈異記』)全体の読み直しが行われる。その分析視覚は「人間関係・従って人間の共同態の根柢たる秩序・道理を明らかにしようとする」(『人間の学としての倫理学』)和辻倫理学を髣髴とさせるものがあり、筆者の学問的立脚点を端的に示しているといえる。

以下、本書の内容を評者なりに概観していくことにする。

二

序章「なぜ「日本国」の説話集を編んだのか」では、仏教説話的色彩の希薄な(非仏教説話)をも含めた諸説話により、天皇の治める末法辺土の「日本国」という場においてひとびとはいかに仏の教えにふれうるのか(二八頁)という課題に対する思想的営為の成果として、『靈異記』が規定される。(非仏教説話)を『靈異記』編纂者・景戒独特の因果論に包摂しようとする作業そのものは『靈異記』研究の定石だが、ともすればナシヨナリズム的解釈に流れがちな「日本国」という概念を「ひとびと」と「仏の教え」との交わりの「場」として捉え直す点に、筆者独自の視点を認めるべきであろう。

第一章「聖」と「凡人」では、「いわば日常生活の背後にある、奇異あやしきこととしての出来事」の全貌を見通すことのできる「聖」と、有限の「肉身」に束縛されるが故に「奇異しきこと」のごく一部を善悪の因果応報というかたちでしか垣間見ることのできない「凡人」「凡夫」とが対比される。その上で、「今・ここ」を超えた存在である「聖」を語ることによって、「今・ここ」に束縛された「凡」たる自らの境遇を自覚するという逆説的構図が示される。

第二章「仏像に祈るということ」で、筆者は「景戒の考える仏像のはたらきの要点のひとつが、それに対したひとびとのあり方をそこにつしだすことにある」(七四頁)と述べる。仏

像には「理智の法身」、すなわち釈迦が自らの肉身を通して他者の因果を主体的に体得できる能力と同質の「絶対知」がやどっており、「聖霊」という熟語の存在に象徴されるように、『靈異記』における仏像もまた「聖」の系譜に連なる存在と見なされる。

第三章「仏とひとをつなぐ〈恥〉」では、分析対象が「聖」から「凡」へと移行する。「慚愧」「愧ぢ(恥ぢ)」という観念は『靈異記』を読み解く上で重要なキーワードのひとつである。筆者は中卷第十三話において、吉祥天女像と夢で交接した優婆塞の言動が「他のひとをも巻き込み、多くのひとびとの耳目を驚かしていくということ」(二〇七頁)に注目し、他者の「慚愧」すべき所行のうち自身の方を見るとき同時に、その所行を「めぐむ」「あはれぶ」ことよって相手が因果に絡め捕られた「欲界雑類」であることをその身に映し出すという、いわば「仏像のはたらきにも重なってくりとみ」(二一九頁)を行うという。このような「慚愧」すべき所行はさらなる伝播によつて複数の第三者に新たな「慚愧の心」を促し、結果として「慚愧」の連鎖を生ぜしめるという。さらに筆者は雄略天皇の「恥ぢ」にまつわる説話が『靈異記』に配されたことの意義や、「慚愧」や「媿ぢ(恥ぢ)」が有する意義を明らかにする手段としての類話収録の意義についても論じる。

第四章「日本国」と天皇」では、「災」や「善」の前兆「表相」と仏教的因果応報思想との意識的同一化を経て、現在世の

境遇をもたらし去世のおこないを「慚愧」した「凡夫」景戒、及び寂仙菩薩の生まれ変わりという「善因」によつて「聖君」に転生した嵯峨天皇に関するふたつの対照的な内容の説話が『靈異記』末尾に配されたと筆者は述べる。さらに聖武天皇の「大誓願」が中巻冒頭に位置することで、景戒は「聖君」天皇のあり方に対比するかたちで自身の存在・あり方を自覚する。その上で景戒は未来世における善果の獲得のための修善に励む一方、他の「凡夫」「凡人」を仏の教えに導くために『靈異記』を編纂した、と筆者は述べる。一見してわかるように、本章は第一～四章を総括する内容を有する、事実上の〈結論〉と位置づけられよう。

終章「縁」で筆者は『靈異記』収録の各説話が「日常の背後に広がるものを垣間見せることよつて、ひとびとを仏とつなぐ「縁」である」(二五三頁)と述べ、擱筆する。

三

管見の限り、近年の『靈異記』研究史は、おもに仏教経論・仏典註釈を援用して『靈異記』を解釈する立場、および古代(仏教)史の実態を反映した〈史料〉として『靈異記』を取り扱う立場という二つの流れが目立つように思われる。

国文学者を中心に、程度の差はあれ長らく「私度僧の文学」(益田勝実『説話文学と絵巻』一九六〇年)という定義に束縛されていた『靈異記』研究は、一九八〇年代後半に至つて日本史や

仏教史といった隣接分野の新知見を積極的に採り入れると同時に、自らも古代仏教の実態を明らかにする上での不可欠のツールとして周辺領域に対して少なからざる成果の還元を行うようになっていった。その結果、ここ四半世紀ほどの『靈異記』研究の発展はそれ以前の時代と比較して、文献実証主義を旨とする古代史・古代仏教史の発展とより密接に関わり合うようになっていく。

一方、『靈異記』に対する「テキスト内在的」な読み込みにより「景戒の考え・思想」を明らかにしようとする筆者の立場は右に示した二つの流れのいずれとも一線を画しているようだ。「本書では、景戒が薬師寺に属していたということをもつて、その思想が法相宗、あるいは唯識教学に偏向し、他宗の教学や僧侶等を否定する傾向にあるとする考えは、さしあたりとらなない」(二九頁)という立場表明からは、ややもすると「テキストへの対し方」を限定する「先入見」ともなりがちな隣接分野の成果から敢えて一定の距離を保ち、「聖一凡」という構図に則した誠実かつ地道な〈読み〉を徹底せんとする筆者の意識を読み取れよう。

このような筆者の〈読み〉の長所が遺憾なく發揮されるのが、第二章に展開される仏像論であろう。従来の先行研究が〈聖一凡〉の関係に着目しつつ、交渉のベクトルを〈聖〉たる仏像から〈凡〉たるひとびと、すなわち救済者から被救済者側への一方通行的なものとしてのみ捉える傾向にあったのに対して、本

書では衆生による「信」「願」という行為を「崇拜対象である仏像に自身のあり方を投影すること」と規定することで、〈聖〉なる仏像(あるいは「聖霊」と「凡」なるひとびととの間に交わされた相互交渉を、文脈に沿うかたちで平易に説明すること)に成功した。

本書で展開された仏像論は、仏像の配された「風景」を通じて現世と他界との関係性を考える美術史研究者・長岡龍作の問題関心に通じるように思われる(『仏像——祈りと風景』二〇一四年、敬文舎)。但し、長岡は仏像および仏像の配される「風景」を〈彼岸—此岸〉という対立項の結節点に位置づけており、〈聖—凡〉を基軸に据える本書とは発想をやや異にする)。文書化・軌範化された公的な法会や儀式とは異質の、即時的・即興的に行われる仏像への私的な〈祈り〉にこめられた意味を論理的に読み解くという作業は、文献実証主義者の必ずしもよく為し得るところではない。筆者の提唱する『靈異記』の〈読み〉は仏教美術、あるいは仏教考古学といった非文献資料を対象とする学問分野との有機的な交流・交渉を経て、従来の『靈異記』プロパーが想像できなかったような、新たな分析の地平を切り拓く可能性をも有していよう。

四

その一方で評者には、本書が「テキストへの対し方」を限定する「先入見」を避けようとした結果、筆者の「テキスト内在

的」読みを規定する別の陥穽に嵌ってしまったように感じられることも事実である。

景戒、および彼と生きる時代を共にした〈凡人〉〈凡夫〉に
とって、釈迦・聖徳太子・行基といった歴史的「聖」「聖人」
や宮廷の奥深く〈大御宝〉^{おほみたまがら}から嚴重に隔てられた「聖君」「聖武
や嵯峨とは、あたかも「崇拜対象である仏像」に対面するが如
く「自身のあり方を投影すること」を現実的・物理的に可能と
する存在だったのだろうか。答えは恐らく否である。だとす
れば、第一・二章で取り上げられた釈迦・聖徳太子・行基、第
一・四章で取り上げられた聖武や嵯峨といった人物を「聖」と
して無条件に仏像と一括する筆者の認識は、「景戒の考え・思
想」を規定するはずの時代的制約から大きく乖離した、極めて
観念的かつ非現実的な見方だと評価せざるを得ない。

もし、筆者の主張するような〈聖凡〉観を実際に景戒が有
していたとすれば、そこには観念的・非現実的な次元における
「聖」との対面の正当性を保証する〈理論〉が必要となるはず
だ。たとえ「先人見」の恐れがあるにせよ、そのような〈理
論〉を『靈異記』テキストから読み取ることができない以上、
僧侶たる景戒が有していたと考えられる仏教的素養、あるいは
『靈異記』成立期における仏教界の動向に、ひとまずその在処
を窺っていくしかあるまい。

『靈異記』の行基菩薩像形成に『梁高僧伝』における神異靈
驗の高僧像の影響をみる藏中しのぶ（「和光同塵・奈良朝高僧伝

の思想——『日本靈異記』行基物語化の背景」初出一九九一年。『奈
良朝漢詩文の比較文学的研究』二〇〇三年、翰林書房）や吉田一彦
（『古代仏教をよみなおす』二〇〇六年、吉川弘文館）、景戒の有す
る「慚愧」の念が中国六朝期の士大夫層にも共通するものであ
ると述べる山口敦史（『日本靈異記』と中国六朝思想——悔過・
懺悔・慚愧」初出一九九〇年。『日本靈異記と東アジアの仏教』二〇
一三年、笠間書院）や近世の考証学者・狩谷掖斎の註釈『日本
靈異記攷証』によって夙に指摘された「人家々々」（阿毘達磨俱
舍論）という概念をふまえて嵯峨天皇聖君論を論じる山本大
介（「人家々」と「聖君」——『日本靈異記』下巻第三十九縁の転
生譚を中心に」『日本文学』六一—九、二〇二二年）らの存在を考
えると、「景戒の考え・思想」を明らかにせんとする筆者の目
標はテキストの内側のみならず、その外延部にも視界を拡げて
いくことで、より大きな達成を果たすことができるのではない
か。このことは〈非仏教説話〉を含む独自の因果律の構築及び
天皇を主題とする説話を巻頭・巻尾に配置することで「日本
国」の差別化を図る一方、中国で編纂された『冥報記』『金剛
般若経集験記』の翻案や仏教経典・経論からの引用に象徴され
るような普遍性への志向をも併せ持つ『靈異記』の内部構造そ
のものとも関わってくるはずだ。

しかるに、このような〈開かれた〉構造をもつ『靈異記』と
いうテキストを分析する本書において（その主張を受け容れるか
否かは別としても）隣接分野の研究成果との積極的な交渉の跡

が見えてこないのは、いったいどうしたことだろう。

五

かつて、子安宣邦はM・フーコー『知の考古学』をふまえ、「言説を通してのその思想主体の内的関係への読みの深まりが、その言説の意味把握の確さとされる」〈読み〉のなかに、「テキストの筆者のほんとうの意図として読みとられた言説を再構成することをめざす」一種の〈虚構〉が不可避的に発生することを指摘した（『事件』としての徂徠学』初刊一九九四年。二〇〇〇年、ちくま学芸文庫）。丸山眞男『日本政治思想史研究』批判を通じて子安が退けようとした「内在的読解」は、「統一的主体として再構成される対象の閉域と、対象へのそのような視線を共有する研究者たちが形成する閉域」とを構成し、「その内部に入ってしまったら、徂徠について語るその言葉を支配している暗黙の前提や、対象に向けられた視線そのものを問うことはできなくなる」（宮川康子「解説」。子安宣邦前掲書所収。周辺領域における『靈異記』研究史の動向はもとより、「再構成された歴史・物語の筋道のうちにその意味を固定」していく「思想史」的方法論に対して鋭く突きつけられた子安の問いかけも視界の外にあるが如き、ある意味で楽観的ともいえる筆者の「テキスト内在」的〈読み〉は、倫理学という学問の「閉域」に陥りかけていないだろうか。

一九七〇年代から一九九〇年代にかけて急速に「研究の細分

化」「研究対象の拡大」「研究方法の多様化」が進展した（森正人『古代説話集の生成』二〇一四年、笠間書院）説話・説話集研究史において個別研究の蛸壺化が進展した結果、雑駁かつ些末な研究が少なからず量産されたことは事実である。その点で、「テキストへの対し方」を限定する「先人見」の要素を徹底的に排除し、自らの学問的立場に対する強い自負・自覚のもと、首尾一貫した視点からの立論を実現させた筆者の姿勢・実力そのものは、評者も大いに敬意を払うところである。しかし、新たな『靈異記』解釈の可能性を豊かに含むはずの本書の成果が、その方法的閉鎖性の故に隣接諸分野の『靈異記』研究と没交渉のままに終わるのだとすれば、これほど残念なことはない。

説話文学や『靈異記』研究に限らず、ややもすると単なる個別事象の指摘の羅列に陥りがちな狭小な視点を離れ、さまざまな学問分野の成果に依拠しつつ、それらを包括的な問題意識のもとで有機的に組み合わせ、新たな〈化学反応〉を絶え間なく発生させていく点にこそ、筆者や評者の志す倫理学・思想史学なる学問の真骨頂があるのではないか。それは果てしない大空から広大な大地を俯瞰する〈気球〉の如きものでこそあれ、柔弱な乳児を外界から嚴重に防護する〈ゆりかご〉の如きものであってはなるまい。

筆者とはほぼ同年代の非力な評者にとって、分析手法の面で自身と立場を異にする本書の論評は刺激的な仕事である反面、身に余る大役であった。誤読や曲解、評価すべき点の取りこぼし

や見当外れの指摘といった非礼については、ひとえに筆者の「海容を乞う次第である。」

(東北大学助教)

森新之介著

『撰関院政期思想史研究』

(思文閣出版・二〇一三年)

島田 健太郎

一

本書は、従来の民衆仏教史観を批判し、撰関院政期の思想について新たな視点を提示した、意欲的で刺激的な著作である。著者の森新之介氏は、一九八三年生まれの新進気鋭の研究者である。「後記」によれば本書は、氏の太学院時代から現在までの七年間の研究成果であり、氏の最初の著作である。本書の主な構成は以下の通りである。

緒言

第一章 民衆仏教史観の研究史

平民主義と仏教史叙述／村上專精の仏教史叙述／民衆仏教史観の闘歩と雌伏／古代対中世の闘争／正統対異端の闘争

第二章 末代観と末法思想

議論の前提／諸史料における末代観と末法思想／末代観の性格／藤原行成／後朱雀帝と小野宮実資、藤原資房／大江匡房／中御門宗忠／歴史思想の要因